

## 広川町の文化財調査

令和2年度中に広川町内で文化財調査が行われました。和歌山県立博物館・文書館、和歌山県教育委員会文化遺産課の専門家の方々が、ほとんど毎月来られました。

これまでもお伝えしました渋谷家文書の解読もそうでしたが、安楽寺、円光寺、広八幡神社、東濱口家、崎山家等で文書関係の調査が行われてきました。旧家の多い広川町ですが、これまであまり知られていなかった貴重な資料も発見されました。新たな歴史の発掘によって、広川町の文化を知ることができます。これまでも、国・県の指定文化財や登録文化財もたくさんありますが、この度の調査によって、私たちの先祖が築き上げてきた文化遺産を守らなければと考えます。また、この広川町の文化・文化財は私たちの誇りです。

特に防災に関する資料は、私たちの今後の災害対策にも役立つものと思います。こうした調査をもとに、『先人たちが残してくれた「災害の記憶」



を未来に伝える』という冊子が作られ、配布しています。ご希望の方は、「稲むらの火の館」へお問い合わせください。

また、町民の皆様のお宅にもこうした古い文書があればお知らせください。特にご先祖が書き残したものの、日記とかメモのようなものに、おもしろい記録がある場合があります。「稲むらの火の館」、役場文化財担当課へお知らせください。



こんにちは！「こども梧陵ガイドプロジェクトチーム」の関西大学近藤ゼミ、龍谷大学石原ゼミです！

本年度は新型コロナウイルス感染症の影響で例年行っている対面での「こども梧陵ガイド」を実施することは叶いませんでした。その代わりとして12月17日にzoomを使用して、こども梧陵ガイド・オンライン交流授業を行いました！

授業の前半では、大学生が広小の6年生に梧陵さんや広川町、防災に関するクイズを出題しました。児童たちは



班ごとに分かれてクイズに挑戦！さすが、1年生の時から防災を学んできたこともあって、ほとんどの班が正解していました。授業の後半では、児童が出演する「クイズ動画」を作成しました。この動画が、今後「こども梧陵ガイド」プロジェクトで活用される予定です。

オンラインでの交流授業は初めての試みで、最初は児童たちが緊張している様子でしたが、だんだんと緊張もほぐれて、大学生と児童の仲も深まり、とても楽しい機会となりました。この取り組みが児童にとって良い思い出となり、さらに防災についての学びを深めるきっかけとなれば嬉しいです。広小の先生方のご協力のおかげで、「離れていても、できることがある」ことを実感しました。皆さん、ありがとうございました！



## 【濱口梧陵学】

## 忘れないだけで天災は防げない

—今村明恒の「廣村の人々に寄す」—

津村 建四郎

&lt;プロフィール&gt;

広川町出身、京都大学理学部地球物理学科卒業、理学博士  
東京大学地震研究所助手・助教授、気象庁地震予知情報課長・地震火山部長、山形大学理学部教授、(公財)地震予知総合研究振興会副首席主任研究員、地震調査研究推進



本部地震調査委員会委員長に3期6年就任。

[研究分野] 地震学

## 1. まえがき

「稲むらの火の館」で、来館者に無料配布されている『「稲むらの火」と史蹟広村堤防』というリーフレットは、平成15(2003)年3月に県下で開催された地震・津波防災の国際シンポジウムの参加者が広村堤防を見学した際に、説明用に私が作成したものです。このリーフレットの2頁から6頁に書かれている浜口梧陵の安政地震津波の際の実話とそれをヒントにラフカディオ・ハーンが創作した“A Living God”やそれを教材化した中井常蔵の『稲むらの火』については、館の大型映像や展示によって、来館者に詳しく説明されていると思います。しかし、7頁目の昭和南海地震津波の際に広村で起こったことについては、あまり詳しく説明されていないのではないかと思います。

昭和21(1946)年12月21日早朝4時20分ごろに発生した昭和南海地震の津波は、約30分後に広村を襲いましたが、浜口梧陵が築いた広村堤防によって背後の市街地は守られました。しかし、堤防に阻まれた津波は、堤防の南西側の江上川流域を襲い、耐久中学校や日東紡績工場などで逃げ

遅れた22人が犠牲となりました。この災害から6年後の昭和27(1952)年12月に、広町役場が『和歌山県廣町 津波略史と防災施設』という小冊子を刊行しています。この冊子を読むと、広村堤防に守られながら何故このような被害が出たのかが分かります、特にそこに収録された地震学者今村明恒博士の「廣村の人々に寄す」という文章は、次の南海地震に備える上でも極めて意義深い内容だと思いますので、今村博士と広村のかかわりと、この文章について解説してみたいと思います。

## 2. 今村明恒博士と広村堤防・『稲むらの火』

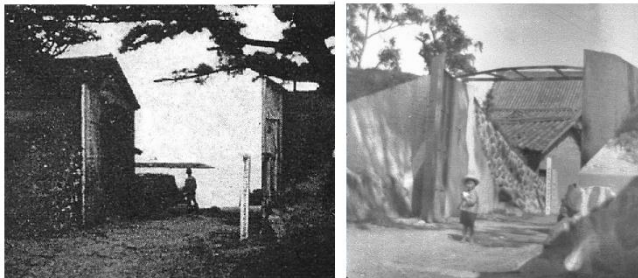
明治・大正、昭和3代にわたって地震予知の研究や地震・津波災害軽減のための社会啓蒙に尽力した東京帝国大学教授今村明恒(あきつね)博士は、関東大震災の直後から、次の同規模の巨大地震が南海道沖で発生すると予想しました。その根拠は、この地域の過去の同規模の地震の繰り返し性と地殻変動の地震間と地震時の変化の特徴でした。今村博士は、昭和3(1928)年に和歌浦に私設の「南海地動研究所」を開設、和歌山、徳島、高知各県で、地震や地殻変動の観測を始めました。今村博士は、昭和8(1933)年に、この地震に対する備えの必要性を説いた『南海道沖大地震の謎』という論文で、来るべき災害を防ぐためにはどうすればよいかを論じ、「実際問題としては其の処法極めて簡単である。即ちそれは最悪の場合を仮定し、之に対して災害を未然に防止し、若くは之を軽減する手段を取ることである。地震特に震火災防止に関する知識及び耐震構造の普及、防潮林、津浪除け堤防築造の如きは其手段中に数ふべきであらう。実に最悪の場合を仮想して之に備へることは災害防止上最も安全にして且つ賢明な処置であらう。右は予が特説するまでもなく、既に地方の識者によりても採られた手段である。

紀伊の国は和歌浦から南へ径七里、湯浅町に近く廣村といふ小さな港がある。醤油業で有名な銚子の浜口家は慶長以来此处で斯業を經營して居たが、続いて起る地震津浪の為め、三度其厄を蒙り、斯くてはならじと、遂に意を決して根拠を現所に移し又村人の為めに多くの慈善事業をなし、特に百年後の子孫の為めとして、独力を以て

津浪除けの堤防を築いた。此は今猶ほ厳存して居るが、斯の如きは、公益の為に尽した記念物としても、將た又、故人の志を成さしめる目的の為に、史蹟として永久に保存すべきものであらう。」

この5年後の昭和13(1938)年に、広村堤防は、国の史跡に指定されました。

今村博士は、昭和8年に、広村を訪れ、村役場などに防災上の注意点について助言しています。その一つが、堤防中央部の切通しの鉄扉（通称、赤門）を、津波の力で自動的に閉じるように改造することでした。これは、村によってすぐに実行



改造前の内開きの赤門（昭和5年今村博士撮影）と  
改造後の外開きの赤門（昭和10年頃撮影）

されました。（写真は改造前後の赤門）

今村博士は、この後、広村堤防と浜口梧陵の事績を詳しく紹介する文章を地震学会の会誌『地震』に書いています。

今村博士は、以前から小学校における防災教育の重要性について文部省に進言していました。昭和12(1937)年に、不滅の防災教材といわれる中井常蔵の『稲むらの火』が国語読本に採択され、今村博士の希望が実現しました。今村博士は、昭和15(1940)年に、これを教える先生方のために、『「稲むらの火」の教方に就て』という冊子を作り、学校に配りました、これには、「稲むらの火」の実話と創作の違いや、津波の基礎知識が分かりやすく解説されています。

この冊子は、広村の各戸にも配られ、小学生だった私も読み、よく理解できました。

一つだけ残念なのは、「津波の前には、必ず潮が引くとは限らない」という注意が書かれていないことです。『稲むらの火』の印象深い引き潮の描写を読んで、「津波の前には潮が引くからそれ

を確かめてから逃げればよい」と思い込んでしまった人が多かったようです。昭和南海地震津波の際にも、地震直後、広村堤防の上に近所の漁師が集まって海辺を眺め、「潮が引かないから津波は来ない」と話し合っていたところへ津波が押し寄せたということです。

### 3. 『和歌山県廣町 津波略史と防災施設』が伝えること

昭和の南海地震津波から6年後の昭和27(1952)年12月に広町役場は、『和歌山県廣町 津波略史と防災施設』と題した本文47頁の小冊子を刊行しました。

私が、この冊子で特に注目したのは、「南海道沖大地震津波 = 昭和の南海道大地震津波につき廣村の人々に寄す = 今村明恒」と題した文章です。この冊子の47頁の「付記」によると、この文章は、南海地震の3カ月後の昭和22(1947)年3月に広村(多分、村長宛)に寄せられたもので、当時の広村長から次の広町長に申し送られたものと推定されます。(なお、「付記」には、昭和23(1948)年3月となっていますが、今村博士は、昭和23(1948)年1月1日に亡くなっているため22年の誤植だと思われます。)

今村博士は、この文章で、南海地震の予知研究と防災啓蒙活動に取り組んできた経過と、それが戦争の激化によって続けられなくなった時に、昭和19(1944)年に東南海地震、昭和21(1946)年に南海地震が発生してしまい、全ての努力が水泡に帰したことを回想し、その一つの原因が、彼が各地を訪れて行った防災への助言が、受け取った人々によって活かされなかったことにあるとし、その代表例として広村の場合を次のように記しています。

「南紀の廣村についてもそうである。浜口梧陵の心尽くしの防波堤も、二か所の切通しの為に其実効の薄らぐのを惜しみ、せめて鉄扉の働きだけでも有効にしたいと考え、村役場に突如闖入してその付替え方を勧めたこともある。また、防波堤の出現は、広川と江上川とを津波進入の主要な地帯となさしめ、従って津波の主力は逸早くこの地



帯に沿うて進入するから、建造物を他に移すか、避難道路は之を避けて計画すべきである等の注意を、小学校の職員室においても陳述したことがある。特に耐久中学校の位置の危険なるは屢々県当局の注意を促し、余と同県出身たる（福元）学務部長に殊にこれを力説したこともあった。余は考えた。若し余が物した「稲むらの火の教え方に就て」という一編が、災害予防に関心をもつ人達に読まれたら波災は大いに軽減されるであろう。況や、この小編は浜口家の好意に依って、村には多数寄贈されたのではないかと。然し事實は果たしてどうであったろう。鉄扉はすらすら自動的に閉じたか。耐久中学校は如何。江上川には水難者は無かったか。これらは今更 余が問うまでもなく、村の人達が熟知している事実である。」

この冊子には、この地震津波による被害について簡潔に4頁記述されおり、

死者22人（全部溺死）、負傷者45人、流失家屋2戸、床上浸水91戸、床下浸水119戸などの被害を挙げ、「最も甚だしい被害区域は、日東紡績株式会社廣工場と付属住宅街であって、又紡績工場の従業員や家族に死傷者の特に多いことは、その殆どが他府県人であり、津波に対する予備知識に欠けた人達のみであったことが最大原因であって、今後に於いては防災施設の完備は申すまでもなく、一般に非常時に対処する避難訓練の必要なるは茲に記する迄もないことである。」という言葉で結ばれています。

死者22名のうち、2名は耐久中学、18名は紡績工場の関係者、その他2名を含め、すべて今村博士が警告していた江上川流域を襲った津波によるものでした。また、鉄扉は錆びついていて閉じなかったものを、近所の住民が掛け矢を振るってやっと閉じることが出来たということです。

なお、この鉄扉が改造前のものであれば、津波の力で押し開けられて、海水が街の中央部に流れ込み、大きな被害を出した可能性があります。

今村博士がこの手紙を広村に寄せた真意は、この手紙を読んだ人々が、何故今回の災害を防げなかったのかを反省し、その教訓を後世に伝え、次の南海地震に備えてくれれば、その災害を防ぐことに役立つと考えたのではないかと思います。そ

して、その真意を理解した広町長らが、この冊子にこの文章を載せたのではないかと思います。

この文章の最後に、今村博士は、次のように書いています。

「凡そ天災は忘れた頃に来ると言われている。併し忘れないだけで天災は防げるものでなく、避けられるものでもない。要は之を防備することにある。」

広村では、戦時中も毎年津浪祭が行われ、津波のことを忘れてはいませんでした。しかし、大地震があったら即座に安全な経路で高台に避難するという心の備えがなかったために多くの犠牲者を出してしまいました。平成23(2011)年の東日本大震災の際にも、この心の備えが徹底していれば、どれだけの人が助かったか分かりません。

#### 4. むすび

私も津波体験者。今回紹介した今村博士の「廣村の人々に寄す」の文章は、世間にほとんど知られていません。この文章、特に、「天災は忘れないだけでは防げない、要は之を防備することにある。」という警句がひろく伝えられて、次の南海トラフ巨大地震への備えを改めて考える契機になればと思います。

なお、以上で引用した今村博士の論文や文章は、「稲むらの火のホームページ」

<http://inamuranohi.jp/>

で読むことができます。

追記: 昭和南海地震津波の際の詳しい実況については、耐久中学に関してだけ、同校の斎藤勇吉先生の回顧録（耐久高校同窓会報「耐久」第19号所載）で分かりますが、被害の最も大きかった紡績工場に関しては、ほとんど分かっていません。当時の体験者等からの証言を集めて、調べておく必要があると思います。

#### ＜第15回稲むらの火講座＞

前号でお知らせしましたが、第15回稲むらの火講座を開催します。ご参加ください。

日時 令和3年3月14日13:30開会

講師 濱口和久先生（拓殖大学特任教授・防災教育研究センター長）